長岡半太郎と「日露戦争を知らなかった学者」

細見博志

はじめに　「日露戦争を知らなかった学者」

「研究熱心で日露戦争を知らなかった学者」という表現に私が初めて接したのは、おそらく今から半世紀近く前の一九六〇年代後半のことであった。当時、ベトナム反戦運動や不当処分に端を発する学生運動が大きな盛り上がりを見せ、旧態依然たる大学のあり方が指弾された。そんな中で、「日露戦争を知らなかった学者」が、学者のあり方として批判的に言及された。この批判は専ら象牙の塔に安住する学者の「非社会性」に向けられた。しかし返す刀で、産業界と癒着した実学的学問の「社会性」にも向けられた。後者が当時の「産学協同」批判である。爾来半世紀、研究者と社会のあるべき関係は、当時の「産学協同」批判から現在の「産官学連携」推進へと百八十度転換した。この様変わりに応じて、「日露戦争を知らなかった学者」に向けられた視線も、おそらく複雑・微妙に変化してきたはずである。

日露戦争後のある時期からこの「日露戦争を知らなかった学者」という表現に、当時の日本を代表する物理学者・長岡半太郎の名前が結びつけられ、「日露戦争を知らなかった学者とは長岡半太郎のことである」という「噂」が流布した。この噂は、第二次大戦前まではほとんど常識――実際は、誤った常識――であった。しかし

逆に戦後に生を受けた人々の間で、この噂を耳にしていた人はほとんどいない、というのも事実である。かくいう私も、「日露戦争を知らなかった学者」という表現こそ半世紀前から耳にしていたが、それを長岡半太郎と結びつけて理解するようになったのは、たかだか数年程前からである(一)。

この小論では、まず「日露戦争を知らなかった学者」という表現の意味するところを考える(第一節)。次いで、この表現と長岡半太郎との関連を考える(第二節)。最後にこの関連の範囲内で、長岡半太郎の人柄を考える(第三節)。用いた資料は主として、長岡自身の著書として、長岡半太郎著、随筆、一九三六年、改造社(略称『随筆』)、長岡の伝記として、藤岡由夫監修　板倉聖宣、木村東作、八木江里著、長岡半太郎伝、一九七三年、朝日新聞社(略称『伝』)と、板倉聖宣著、長岡半太郎、朝日評伝選十、一九七六年、朝日新聞社(略称『評伝』)である。それ以外に娘婿の、岡谷辰治(ときはる)著、長岡半太郎博士、近代日本の科学者、第三巻、一九四二年、人文閣(略称「博士」)と、永野繁二、長岡半太郎論、『科学知識』、一九四六年五、六月号、四〇-四八頁(略称「論」)などを用いた。

第一節「研究熱心で日露戦争を知らなかった学者」の両価性

単なる表現上の問題であるが、「研究熱心で日露戦争を知らなかった学者」には異なる表現が存在する。「日露戦争」(一九〇四・二-一九〇五・九)の代わりに、「旅順陥落と日本海海戦」(それぞれ一九〇五・一・二と一九〇五・五・二七-二八)が来ることがある。また「学者」の代わりに、「科学者」が用いられることがある。

（一）この表現の肯定的含意

さて、そもそもこの「学者」が人々に両面価値的(ambivalent)なものとして意識されていることは、最初から予想されるところであろう。肯定的な含意としてまず取り上げることのできるのは、真理追究のための精神集中である。ひたすら実験室で研究に専念する姿は、目の前の不思議に子供のように魅了されている、純粋無垢な研究者の姿を彷彿とさせる。もとよりこのような精神集中も過度となれば、市民生活に支障を来し、「変人奇人」というレッテルを貼られることとなる。このレッテル自体両価的であり、温かい眼差しが向けられる場合もあれば、忌み嫌われて邪険に扱われる場合もある――映画のタイトルでも、「博士の愛した数式」（二〇〇五、同名の原作小説は小川洋子著、二〇〇三）と「博士の異常な愛情」（一九六四）とでは「博士」のニュアンスは正反対である――。またこの精神集中は、しばしば金銭欲、名誉欲、権力欲の否定として理解される。現実にはこれらの欲望を満たすための精神集中、ということもありうるのだが、一般に、これらの欲望を邪念として退け、ひたすら真理追究に邁進する「清廉潔白」な学者像が想い描かれる。

このような「学者」として明治期の人々が長岡半太郎を想い描いたことは第二節で見るとして、長岡半太郎自身常々精神集中の重要性を強調して止むところがなかった。その長岡が大阪帝国大学総長として行った「宣誓式訓示」（一九三三年四月二〇日、『随筆』三九〇頁）で、自らにまつわる「噂」を念頭に置きながら、精神集中の例として、ニュートン、ヘーゲル、日本人解剖学者をあげている。実験に熱中していたニュートンが、途中でふとゆで卵を食べたくなり、卵をゆでているつもりで気がついたら代わりに計時器を鍋に入れ、計時器の代わりに卵を手にしていた、という。また独逸の哲学者ヘーゲルがイエナで、書き上げた『精神現象学』を郵便で出版社に送ろうとしたら、戦争中であったために郵便局は閉鎖されており、その帰途ナポレオンの進軍に出合って「世界精神が行く」と叫んだ。それ自体有名な話であるが、「戦争を知らなかった」ということがここでの味噌である。端的に戦争を知らなかったというのはある日本人解剖学者の例であるが、彼の名前は明

らかにされてはいない(二)。臨床医学に自らの適性を見いだせなかったこの人が、ある人の勧めで解剖学者となり、後に一流の解剖学者となったという。寝ても覚めても解剖学に勤しんだために、「日清戦争を知らなかった」というのである。

実験に熱中のあまり、自らの結婚式に出るのを忘れた、というエピソードの持ち主は、長岡の弟子でのちに東北帝国大学教授、同総長となり、KS磁石鋼の発明で有名な本多光太郎（一八七〇―一九五四）である。式に新郎がいないので、関係者が大学の実験室にまで来て当人を探し当てたという（『伝』二三八頁）。今でも本多の母校である愛知県のある高校では、郷土の偉人として本多のこのエピソードが語り継がれているという。また、長岡、本多らのすさまじいばかりの研究ぶりは、長岡の弟子で本多の後輩でもある寺田寅彦の口を介して、寺田の弟子の中谷宇吉郎らによって書き留められている(三)。

（二）否定的含意

両価的な「研究熱心で日露戦争を知らなかった学者」の否定面として取り上げられるべきは、その非社会性ないしは反社会性である。第二次大戦後日本の科学者は湯川秀樹に代表されるように、しばしば核兵器廃絶を求める平和運動の先頭に立って行動してきたが、彼らを突き動かしたのは、基礎的・理論的な物理学の研究が核爆弾をもたらした、という痛切な反省であった。その反省に立てば、「日露戦争を知らなかった学者」は、自らの研究がどのように応用されるかについて関心も責任ももたない学者と受け止められた。そして、戦後のあるべき科学者像はこのような学者を乗りこえる方向で形成されてきたといえよう。

また一九六〇年代後半の学生運動の盛り上がりの中で批判されたのも、一つには、象牙の塔に立てこもって自らの専門分野にしか関心をもたず、「専門馬鹿」と侮蔑的に称される研究者のあり方であった。ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーが晩年に行った講演『職業としての学問』（一九一九）では、馬車馬の如く「目

隠し革」をつけて脇目も振らず目の前の事象（「日々の要求」）に沈潜すること（「事象への献身」Hingabe an die Sache）が、学者としての不可欠な資質として要請されている。しかしそれは、ヴェーバーの講演の主旨からすれば、おそらく盾の半面に過ぎない。目の前の事象への精神集中とは本来、抑えがたい関心の拡大を前提とし、その拡大する関心を禁欲的に制御するという意志の力動的な営みである。はじめから、禁欲すべき関心の広がりをもたずに徒に「目隠し革」を付ければ、学問と文化の意味喪失が避けられない、というのがヴェーバーのもう一つの、そしてより重要なメッセージであったはずだ（ちょうどゲーテの『ファウスト』において、ファウストの弟子「ヴァーグナー」がその悪しき典型を示しているように）。

六〇年代後半において批判の対象となったのは、象牙の塔に立てこもる「専門馬鹿」的学者像だけでなく、それと一見正反対の、「産学協同」に邁進する学者像もそうであった。これらの学者は、もはや「日露戦争を知らなかった学者」ではない。むしろ学問に対する社会の要請を受け止め、それに対応しようとした学者である。しかしそのときの「社会の要請」は、実際には「産業界の要請」でしかないと受け止められたところに、産学協同批判が生じた所以があった。実学的な工学や、法学、経済学などで、公害などの住民運動に対して、企業のお先棒を担いでいると見られた学者が批判されたのである（その現代版が「原子力ムラ住民」への批判である）。ベトナム反戦運動の燃え上がっている最中、「戦争を知らなかった学者」ではなく、端的に言えば「戦争にコミットする学者」が問題とされたのである。

「日露戦争を知らなかった学者」に対する戦後の批判は以上の通りであるが、はたして戦前には批判は存在したのか、したとすればどのような観点からか、は必ずしも明らかではない。おそらく、産業立国と軍備拡張という国是からして、日本の基礎科学が非実用的で役立たずだという批判は、戦前の産業界と軍部からたえず投げかけられたであろう。特に第一次大戦によって、ドイツの製薬、化学、光学などの製品の輸入が途絶え、代替品製造が日本の工学技術にとって急務となったが、彼我の技術力の差を埋めるのは容易ではなかったであ

ろう。そのため科学政策として、基礎科学よりも応用科学に、理学よりも工学に、力を注ぐべきだという主張は繰り返しなされたであろう。その過程で、「日露戦争を知らなかった学者」というキャッチフレーズは、基礎科学や理学の学者を批判するために意図的に流された、という可能性は十分存在する。しかし仮にそのような意図を産業界や軍部が持っていたとしても、この噂が長岡半太郎という人物と結びつけられたことは、意図したところを達成するためには却って逆効果となったのではないだろうか。というのも愛国主義的な長岡は、基礎科学の産業や軍事技術への応用にも熱心であったからである。いずれにせよ、この噂の普及に、産業界や軍部がどのように関係していたかは、明らかではない。

第二節　噂の主としての長岡半太郎

（2000（平成12）年特殊切手「文化人切手」）

（科学技術とアニメ・ヒーロー・ヒロイン（2003－2005））

まず、一般的な国語辞典によって長岡半太郎を紹介しよう。「長岡半太郎、一八六五-一九五〇。長崎の生まれ。ドイツでヘルムホルツらに学ぶ。明治三六年（一九〇三）土星型原子模型を発表。また地震波の伝播などの研究に業績を残した。阪大総長・学士院長などを歴任。文化勲章受章。」（『デジタル大辞泉』、小学館）

（一）噂が流布した経緯

さて本節の課題は、「日露戦争を知らなかった学者」と長岡半太郎の関係であるが、「この学者とは長岡半太郎のことである」という「噂」がどのようにして流布するようになったのかについて、長岡の弟子で娘婿であり阪大教授を務

めた岡谷辰治は一九四二年に次のように記している。

日露の役の数年後、ある文士の創作のうちに「研究に夢中になりすぎて、旅順陥落も日本海大海戦も知らなかった科学者」が登場したことがあった。さあ事だ。読者の多くはこの科学者の本体を探索し始めた。このような科学者の存在は不可能なのは常識でも了解できるものを、甲だろう、否乙だと想像を逞しうし、遂にこれは長岡先生だと決定してしまった。爾来二十年日露戦争を知らなかった長岡博士が現れる。甚だ妙な事ではなかろうか。（「博士」二六四頁）

ここで記されている「ある文士」については、その正体を明らかとする手がかりは見いだされていない。またその時期も、「日露の役の数年後」とあるだけで、はっきりとは分からない。日露戦争からおよそ三〇年後の一九三三年に長岡は、大阪帝大宣誓式訓示で、精神集中の重要性について述べた先の引用の後で、この噂に自ら言及している。

……精神集中の弊は他を顧みないから世間と不通になって、所謂井戸の蛙となる処がある。果たして前に申した解剖の先生も日清戦争を知らなかったことは事実である。日露戦争を知らなかった人もあったように消息通は書きたてたが、それは全く嘘である。我輩を阪大三禿の一人にしたと同様である。昔漢学者も同じ譏を受けたものと見えて頼山陽が「井戸の蛙と譏らば譏れ花も散り込む月も差す」と都々逸を口ずさんだので判る。此の点大いに警戒すべし。然し大阪のような四通八達の地に居れば、そんな患いは毫もない。諸君がどんな精神集中を為した処で散漫になる憂いはあっても、世間とは疎くなることは不可能である。…（「宣誓式訓示」、一九三三年四月二〇日、『随筆』三八九頁）

また娘婿の岡谷は、先の引用文につづけて次のように記している。

> 数年前長岡先生が大阪帝国大学総長として大阪に屡々数日間ずつ滞在せられたことがあり、自分もその折は側近者たる喜びを度々得た。数度若い新聞記者が「先生は御研究に熱心で、日露戦争もご承知なかったそうですね」と無遠慮に問うことに遭遇した。長岡先生は「僕は日露戦争当時、日本に生きて居たよ」と云って、呵々大笑せられるのであった。（「博士」二六四頁）

このようなやりとりが本気で行われていたとしたら、長岡が大阪帝大総長の頃（一九三一-三四）、この「噂」を真にうけている人が新聞記者の中にも実際にいたことになる。また戦後の一九四六年になっても、この「噂」に言及した永野繁二による「長岡半太郎論」が、科学雑誌『科学知識』（一九四六年五、六月号）のコラム「人物評論」に掲載された。

> ……科学者は研究室だけの科学でなく、社会のための科学、人民とともにある科学を主張するに勇気と真実性を発揮してこそ、真の科学者、文化人といえる筈だ。研究室に閉じこもって日露戦争も知らなかったという非科学的、非社会的な行動は決して科学者がその文化的使命を全うするということにはならないし、官僚や軍閥のために人民をぎせいにするような戦争に科学を全面的に協力せしめることに努力するのも真の科学者の使命とはいえない。（永野繁二、「論」、四三頁）

上述の表現でもって『伝』（三〇一頁）も『評伝』（一九六頁）もともに、永野繁二がその噂を「真にうけ」、

それをもとに長岡の行動を「非科学的、非社会的」と論難した、と解釈している。ただ、このコラムで永野が長岡の「噂」に言及したのは上の引用の一箇所だけであり、永野がこの噂を真にうけていた、と断定できるかどうかには疑問が残る。というのも、世間に流布している「噂」に鉤括弧抜きで言及することはままあるからである。それにしてもこの永野の一文は、社会に背を向け社会と隔絶した研究者のあり方と、科学行政の責任者―長岡は「日本学術振興会」理事長と「日本学士院」院長であった ― として戦争遂行に協力する研究者のあり方、言い換えれば超俗性と愛国主義・民族主義、あるいは一九六〇年代後半の図式を用いるなら「象牙の塔」と「産官共同」という、一見水と油の如き二つの面が、日露戦争と太平洋戦争という通時的な流れの中で、長岡という一箇の人間に具現化されていたということを示唆している。その上で、この二面がともに本来の「社会のための科学、人民とともにある科学」という理念に背馳するのではないか、と指摘している。長岡を「非科学的、非社会的」と批判したのは、「噂」を誤って真にうけたからだけでなく―確かに永野は噂を真にうけていたかもしれない―、「噂」によってシンボライズされる、社会に背を向けた研究者の二つのあり方をともに批判しようとしたからである、と解することができる。その意味で永野の批判は、単なる事実誤認として葬り去られてはならない、重要な見識を示していると思われる。

（二）噂が流布した背景

そもそもこのような「噂」が世間に流布するには、それなりの理由がなければならない。『評伝』（一九六頁）によれば、「たしかに、このうわさは超俗的な長岡の風格をしのばせるものである。……研究熱心で日露戦争も知らなかった科学者に該当しそうな超俗的な科学者といえば、長岡を第一番にあげるのはごく自然なことであったろう。事実、長岡は日露戦争当時、原子模型や津波の研究に没頭していたのである。」（『伝』三〇一頁も参照）実際原子模型の研究と日露戦争とは時期的に完全に一致していた。『伝』（三〇〇頁）によれば、「長岡の原子模型の第一論文の載った『東京数学物理学会報告』第二巻第七号の発行日が一九〇四年の二

月二日で、イギリスの雑誌 *Nature* に長岡の最初の letter が載ったのは一九〇四年二月二五日であった。そしてその後長岡は一九〇五年四月までに土星型原子模型に関する論文をたてつづけに七編も発表したのである。」『報告』論文と *Nature* の letter との間に、一九〇四年二月八日のロシアへの宣戦布告が入るが、執筆時期としてはともに当然宣戦布告以前のことであった。

また同時に、「日露戦争を知らなかった学者」に先行して「日清戦争を知らなかった学者」が実在したと思われていたことは、前述したように、一九三三年に行われた長岡の「宣誓式訓示」からもうかがえる。その人は長岡よりも三〇歳近く年上で、後に「日本解剖学の父」と呼ばれた田口和美であった(二)。日清戦争を知らなかった学者がいたのだから、日露戦争を知らなかった学者がいても、必ずしも不思議ではない、と世間が理解していたとしても、これも不思議ではない。

(三) 長岡自身の日露戦争に対する態度

解剖学者田口和美と異なり、長岡は日清戦争当時留学先のドイツにいたが、遅れて伝わる戦況の推移に文字通り一喜一憂しているさまが、『伝』の指摘のように、一八九五年一月二八日付の手紙の下書きから読み取れる。長岡の「超俗性」は、田口和美のそれとは全く異質であり、あくまで日本という国家に開かれ、明治という時代に向けられていたのである。

> 御地は況日（けいじつ）征清事件にて大分騒がしく候趣必然の儀に奉存候。小生如き隔遠の地に有之ても日本軍の勝報に接する毎に愉快に勝（た）へず、修学の妨となることなきに非る際、御地に在ては更なるべしと奉想察候、御申越の通、旅順屠殺の件に関し、就中英字新聞は悪口罵詈を極め、今回の事件に関し、英国程甚だしき嫉妬心を生じたるものは無之相見え、小癪にても摘発せんと企て居る模様、大

人気なき事実言語に勝（た）へざる次第に候。（『伝』一七五頁、三〇〇頁も参照）

それに比して日露戦争時における長岡の言動は、必ずしも十分には知られていないとのことであるが、それは研究に追われて寧日なかったということであろうが、その中で旅順陥落（一九〇五・一・二）寸前の一九〇四年一二月二五日東京帝大物理学の集い「ニュートン祭」で、講演「ヘルムホルツ先生の十周忌」と題して行われた講演の中で、彼の日露戦争に寄せる関心ぶりがうかがえる。

日露戦争開始以来、吾人の耳朶に響くは、戦争の話多くして、就中旅順攻囲の如きは、学術的なれば、吾人の特に注意を惹くこと少しとせず。其戦争の長引きたるは、収斂悪き級数に似て、其要塞攻撃は物理研究の方法に彷彿たりと云ふ方適当なからんか。……（『伝』、三〇一頁）

そして彼の日露戦争への関心の強さを何よりも証しているのが、再婚後授かった五人の息子すべてを、日露戦争にちなんで命名したことである。先に引用した娘婿の岡谷辰治は「長岡半太郎博士」で次のように記している。

……万民待つに待ったかの旅順陥落、ちょうど男子誕生。依って旅順の一字を与えて順吉と名付けられた。次は遼陽の会戦で、次子には遼吉。日本海の会戦の大勝利により、又鐵嶺の大戦闘に於ける無比の戦果により遂に敵は和を乞い、乾坤一擲の戦争は輝かしき勝利の栄冠を祖国の上に飾り、戦陣は収まった。これを記念する為に次に生まれた男子に鐵吉。……征戦幾十箇月、遂に皇軍は凱旋。……大軍の祖国への凱旋。これを書経では「班師振旅」とも云う。振はこの際帰還即ち凱旋の意である。依って末子を振吉と命名せられた。（「博士」二六二頁）（四）

長岡は『伝』（三〇一頁）が称するように「研究の鬼であると同時に熱烈なる愛国者・民族主義者でもあった。」あるいは『評伝』（一九六頁）で記すように、「研究熱心で超俗的な科学者であったが、又それと同時に熱烈なる愛国者・民族主義者でもあった」のである。

第三節　長岡半太郎の人柄

本節では、「噂」に関連する限りで、彼の人柄を眺めてみよう。

（一）超俗的にして愛国的

長岡半太郎は研究に沈潜して、「日露戦争を知らなかった」と解されたほどであった。彼自身も学生たちに精神集中の重要性を繰り返し強調した。しかし他方で、国難に対して、明治の人間として、あるいは士族の出として、真正面から全力で立ち向かっていった。彼には田口和美の「日清戦争を知らなかった」生き方は、おそらく考えることができなかった。精神集中を説いたが、決して国家・社会からの遊離を容認しなかったのである。慶応元（一八六五）年に生まれた彼には常に、欧米列強何するものぞ、という独立不羈の意識があった。欧米・白人種に追いつき追い越せ、というのが彼の骨身にしみこんでいた精神（エートス）であった(五)。娘婿の岡谷辰治によれば、長岡自身がこの精神を常々ルイ・パスツールの言葉で語っていた。「『科学には国境なし、しかし科学学者〔ママ〕は光栄ある祖国がある。』」これは七十猶予歳の今日迄長岡先生の胸を去らないものである。」（「博士」二六四頁）

長岡半太郎は一見秀才中の秀才のように見られているが、小学校の時には落第しており、小学校での落第と

いうのは珍しく、自らも語り草とした（『伝』一八-九頁）。落第の理由は必ずしも判然としない。「いずれにせよ長岡半太郎が当時としても劣等な小学生と見なされていた方であることは否定しえないであろう。」（『伝』二〇-一頁）また、一八歳の時には東京大学物理学科を一年休学した（『伝』三九頁）。その理由は、自然科学研究に東洋人が果たして能力を持っているかどうかを確かめるためであったと伝えられている。一年間の彼なりの探求の結果に自信を得て、彼は物理学に復帰した。欧米に対する独立自尊の精神は、同時に人間の卑屈さに対する蔑視ともなる。長岡のこのような姿勢（エートス）は、寺田寅彦が長岡における「武士道の名残り」と見なしていたものに通じるであろう(六)。このような「武士道の名残り」に、彼の所謂お役人嫌いや「総長嫌忌病」（「博士」二九七頁）も起因するといえるかもしれない。しかし他方で、自らが一箇の権威となった暁には、自ら卑下し他者に阿ることへの自戒は、徒に他者への威圧となった。権威主義を嫌っていたはずなのに、自らが他者を畏怖させる権威主義の権化と見做されるようになったのである。

（二）反官僚主義的、反権威主義的

長岡に存在したであろう独立自尊への希求は、権威に阿ることへの蔑視となり、彼の反官僚主義的、反権威主義的な態度へとつながった。「一九一八年大学制度会議議事録概要」と題した自筆のメモには、次のような彼の考えが認められている（『伝』五一五頁）。

〔長岡が大学を卒業した〕明治二〇年前後教授の候補としては空巣狙いの観ありし事。今日教授たるの困難。何れも好個の人物を得難し。工業方面に関係ある学科に於ては、多くの点に於て愚者若くは勲位に願望あるものにあらざれば容易に教授になるものなからん。

殊に梯子制度は良教授を得るに益困難を来さしむ。外国にありては此の如き梯子制度はなきものと考ふ。

此弊の一掃せざる間は大学の萎靡振るはざるは当然である。誰か劣等なる老教授の下に屈服することを快しとするものあらん。誰か其研究を劣等なる人に掣肘せらるるを好むものあらん。

ここで言われている「梯子制度」なるものは、地方で功成り名を遂げた教授をベルリン大学や東京大学が招聘するやり方で、「転任主義」とも言われる。長岡の考えでは、教授は研究の第一線を自ら担う者でなければならず、学生に範を垂れると同時に学生に課題を与えて育てなければならない。彼は必ずしも研究能力の衰微した老教授が、例えば文部大臣になった数学者・菊池大麓や東大総長になった物理学者・山川健次郎のように、顕職に就くことを批判するのではなかった。むしろ、研究能力なきまま、現職の教授職を奉ずることに弊害を見いだしたのである（『評伝』一六九頁）。その意味で「研究中心の実力主義」（『評伝』一九八頁）を主張した。その良き例を、二八歳でケンブリッジ大学のキャベンディッシュ研究所所長に抜擢されたJ・J・トムソンや、やはり若くして抜擢されたアンリ・ポンカレに見いだした（『随筆』一七二頁）。そして彼自身は、あくまで研究者として自ら立つべく、大阪帝大総長への要請を拒める限り拒んだのであり、自らの信念を戯れに「総長嫌忌病」と呼んだ。また彼の勲章嫌いも知る人ぞ知るであり、『評伝』（二三五頁）は、長岡が自らの勲章を焼いたという話を伝えている。「地位とか名誉とかいえば、かれは政府からもらう数々の勲章にも関心をもたなかった。いやそういうものには強い反感を持っていたといった方がよいであろう。一九一五年と一九一六年と一九一八年の東京帝大理科大学の卒業記念写真には、勲章をつけた教授たちが並んで写っているが、一人長岡だけは勲章をつけず、気むずかしそうな顔をして写っている。」（『伝』五一五頁）

（三）自らが権威と化す

『伝』（三八八-九〇頁）によれば、『梯子制度』を批判した先の自筆メモの五年前の一九一三年に長岡は、

「日本に於ける物理学の研究」を著し、この論文の最後で、日本の物理学の不振の主因は指導者の欠乏にあると述べているという。それはさしあたって自らの責任の自覚であろうが、同時に弟子や後進に対する期待の昂進も伴っていた。「このころすでに四七歳となっていた長岡は自己の限界を自覚し、後進に期待をかけるようになっていたのである。そのためであろうか、この頃の長岡はたいへん怒りっぽくなっていた。……『雷親父』という綽名……。」（『伝』三九〇頁）あるいは時期ははっきりしないが、「長岡は誰に向かっても、気に入らないことがあるといきなり大声で『バカヤロー』の一喝を与え、…そのため、長岡はまな弟子をはじめ、多くの人々にこわがられていた」という（『伝』六七一-二頁）。

長岡は一九二六年に東大教授を定年退職したが、その後も地震研究所に籍を置いていた。期日ははっきりしないが、長岡が弟子で東大教授の寺田寅彦に批判されるという「特筆すべき一つの小事件」（『伝』五七五頁）が起こった。それを初めて伝えた寺田の弟子・中谷宇吉郎によれば「皆が強い印象を受けた大事件」であった。中谷は「坪井〔忠二〕と宮部〔直巳〕の諸兄」から聞いた話として、寺田（一九三五年没）はもとより長岡（一九五〇年没）の亡くなった後の一九五一年三月に漸く、「三〇年後の今日」もありありと覚えているとして次のように記している。「〔長岡の講演後〕寺田先生がすっくりと立ち上がって、こういうふうに机に両手をついて、少しぶるぶる震えながら、『先生の今日のご講演は、全く出鱈目であります』といわれるんだ。いや驚いたね。みんながシーンとしてしまったんだ。〔寺田――引用者註〕先生は真っ青な顔をしておられるしね。」（『中谷宇吉郎随筆選集』、第二巻、朝日新聞社、一九六六年、二八七-二九〇頁。『伝』五七五-六頁。同様に、小泉信三の「又聞き」参照、『伝』六五六頁）寺田はまた、つとに一九二四年四月一二日の日記で、「日本で科学殊に物理学が駄目なのは学界の長老らの不見識によることが多いと思う。……流行のものでなければ物理でないように考えて居るらしい。それを追っかける方が時代に遅れて居る。却って一向流行らぬ時代おくれのやうな事を平気でやって居てこそ新しい生面を切り開く余地はあるのである。」（『伝』五一六頁。寺田寅彦

全集第十二、五八八頁、一九三七年、岩波書店）この「学界の長老」には、『伝』によれば、長岡も入るという。

湯川秀樹は長岡が阪大総長の時代に物理学の講師を勤めたが、「長岡半太郎先生のことなど」で長岡に対する「敬愛の念」を表明している。それでも「……長岡先生は誰でも頭ごなしに叱りつけるこわい先生だといわれていたので、元来人見知りの強い私には、余計に近寄りにくく思われた」と記している（『続　わが師わが友』、筑摩書房、一九五一年、二〇〇頁）。湯川はまた『伝』序文で、長岡半太郎を「見識と独創の人」と呼び、長岡の「独創」については、一九〇三年の土星型原子核模型を世界に先駆けて提唱したことを指摘した。「見識」については、「実例的にいえば、ある学者の業績をその才能と人物の一体として把握し、その長短について一言のもとに断案を下す……。一種爽快の感」とまとめ、さらに次の如く付け足す。「ただし先生の断案が否定的であったがゆえに、萎縮させられてしまった学者が少なくなかったと聞く。それを思えば、先生の見識は功のほかに罪をも伴っていたことを認めざるを得ないのである。」

先に引用した永野繁二によれば、「〔長岡半太郎〕博士は今年とって八十二歳。正に老人の域に達した人であるが、いまだに斯界ににらみをきかしている。いちどこの人ににらまれたが最後一生涯うかばれないという正に封建的学閥の神様みたいな人である。東大はもちろんのこと各地の帝大の理学部の教授になるには、長岡博士に一度うかがいをたてるというほどのボス的封建的存在となっているとまでいわれる。」（永野繁二、「論」、四〇頁）長岡はこの四年後の一九五〇年十二月十一日享年八五歳で研究中に急逝した。長岡が望んでいたかどうかは別にして、彼が「ボス的存在」と周囲から見られていたことは否定できないであろう。

（四）長岡の社会的見識

長岡は科学的見識ではもとより日本でも最高の知性の一人と目されていた。同時に漢文学の素養も深く、

『随筆』の「旅行記断片」では満蒙を行く列車の中で、「史記」や「文選」を自在に操って蘇武、李陵、王昭君を活写し、岡谷辰治を感嘆させている（「博士」二六七-八頁）。しかし、こと国家や社会に関する見識においては、全く精彩を欠いていた。そのことは『伝』や『評伝』に散見されるが、特にイギリスのラザフォードとの会談において一際その印象が強い。

一九一〇年七月にブリュッセルでの「輻射学万国会議」の後、長岡は本多光太郎とともにマンチェスターのラザフォードを訪問した。「長岡はこの時招かれてラザフォードの自宅にも行き、雑談を交わしたが、そのときラザフォードは『日本の満州に対する態度を揶揄し、諧謔交じりで頗る論ぜられた』という。当時既に日本の侵略政策はラザフォードの目にも明らかになっていたのであろう。ところが、これに対して長岡は『放射能做（さ）と東洋政策とはあまり関係はないようだが、英国人は通であることが分る』と記している。イギリス市民の普通の政治感覚もまるで理解できなかったのである。これをみても長岡がいかに政治について無関心・無知であったかが分かる。」（『評伝』二一六頁。二七一頁ではさらに、「長岡は、日本の帝国主義政策がまちがっていることを、海外の科学者から直接聞く機会ももっていたはずであるにもかかわらずである」と付け足している。同様に『伝』三二八頁参照）

原子爆弾投下や戦局についても、長岡は決して明るくなかった。長岡の日記によれば、昭和二〇年八月六日広島に落とされた「特殊爆弾」が原子爆弾であるかどうかについて、九日の技術院の会議において否定的な見解を表明していたが、それは「全部がU235からできているとは考えられず」という推測に基づいていた。彼は米国の経済力と技術力に、結果として言えば、無知であった。同時に和平工作を、「戦争にケリを付けるのではなかろうかと思われる挙動」、「降伏に一歩を踏み出した傾向が懸念」と表現しており、この時点においても彼は、和平工作に対しては懐疑的であった（『伝』六七六頁、『評伝』二七〇頁）。また、『評伝』によれば、「敗戦後、長岡は『だまされた』と思った。長岡は早くから軍を批判し、日本の科学技術の弱さをよく知

っていた。しかし、それでもなお日本の戦争目的の正しさと日本の勝利を信じ、戦争反対や和平交渉の促進を主張したことはなかった。長岡は社会や政治の問題にはまるで暗かったのである。」（『評伝』二七〇頁）「だまされた」という述懐の出典は、必ずしも示されてはいない。もしもそれが事実とすれば、日本の学術行政のトップに立つ人間の歴史に対する理解度は、一般の庶民と何ら異なるところがなかったことになるだろう。

長岡半太郎と「日露戦争を知らなかった学者」との関連をこれまで尋ねてきた。確かに、長岡半太郎は「日露戦争を知らなかった学者」ではなかった。しかし、日中戦争や太平洋戦争について、その社会的意味を認識していたのか、少なくとも認識しようとしたのか、疑問である。日本における最高の知性の一人と目される長岡半太郎は、「日露戦争を知らなかった学者」ではなかったかもしれない。しかし、国家と政府が起こす戦争に対して無知であった。ひょっとして彼は最後まで、本当の意味で「戦争を知らなかった学者」であり続けたのかもしれない。

（註）

（一）野崎敏郎氏（仏教大学）の一九一一年の私信に教示を得た。

（二）この解剖学者は田口和美（一八三九-一九〇四）のことではないか、と推定されている。田口は「医学校生徒」として、明治二（一八六九）年に行われた日本初の篤志解剖の執刀者となったが、そのことは小説家吉村昭の『梅の刺青』（一九九九年、吉村昭『島抜け』、新潮文庫、二〇〇二年、所収）に描かれている。後に東京大学の初代解剖学教授となり、一八九三年には日本解剖学会を創設して初代会頭に就くなど、わが国の近代解剖学の歴史に大きな足跡を残した。彼には「新聞も読まずに解剖学のみひたすらに研究し、日清戦争も終

局まで知らなかったという逸話が残っている。」
(http://blog.livedoor.jp/ijinroku/archives/51629655.html、二〇一四年七月一九日確認)

(三) 例えば、中谷宇吉郎、『冬の華』、先生を囲る話、一五　本多先生と一緒に実験された頃、中谷宇吉郎選集、第一巻、一九六六年、朝日新聞社、一三七-八頁(同じ文章が、中谷宇吉郎、寺田寅彦の追想、甲文社、一九四七年、一九四-七頁にも収められている)。

(四) 正確には、順吉は一九〇四年二月一〇日誕生で、その日にロシアに宣戦布告された。旅順陥落は一九〇五・一・二のことである。また順吉、遼吉に次いで寛吉が一九〇九年八月二日に生まれたが夭死。「寛城の戦い」に因む(『評伝』一九七頁、『伝』三〇二頁)。

(五) 岡谷辰治は、第二節で引用したように、長岡の五人の息子の名前が皆日露戦争に因んでいた、ということを述べるに際して、長岡が如何に熱烈な愛国者であったか、ということを次のように強調している。「日露戦争当時学生であった人に聞けば、先生は常に教壇に実験室に皇国の宇内(うだい)に比なき国体なる所以を説き、外遊幾度かの体験により東亜は日本人の手で盟主として治むべきことを叫ばれたものだと云ふ。」(「博士」二六二頁)この表現には、日露戦争当時なのに既に「大東亜戦争」のスローガンがちりばめられている。岡谷の一章を収めた書物(『近代日本の科学者』第三巻)が一九四二年八月刊行であり、太平洋戦争に突入して間もない当時の「ほとぼり」を認めることができるのではないか。『伝』(三〇二頁)は、この箇所は「大東亜戦争」時代の「つけたり」か、と想像している。

(六) 中谷宇吉郎、『日本のこころ』、長岡と寺田(一九五一年三月)、中谷宇吉郎選集、第二巻、朝日新聞社、一九六六年、二八七頁。

長岡半太郎と「日露戦争を知らなかった学者」

細　見　博　志

概　要

戦前の日本を代表する物理学者・長岡半太郎には、生前から、「研究熱心の余り日露戦争があったということを知らなかった」、という「噂」が立てられていた。この噂は全く事実無根であるようだが、噂として戦前は広く世間に流布していた。それにしても、そもそもこの噂は長岡半太郎を褒めているのか、貶しているのか、はたまた、 長岡半太郎の盛名を借りて、基礎的・理論的な自然科学者のあるべき姿を訴えたのか、逆に彼らの世間知らずぶりを揶揄しているのか。拙論では、長岡半太郎の随筆と伝記などの限られた資料から、この噂とその背景を考える。この考察がひいては、日本における学問・科学と社会の関係史の、一つのケース・スタディとなれば幸いである。

Hantaro Nagaoka and ‘Russo-Japanese War not-knowing scientist’

Hiroshi HOSOMI

Summary

Nagaoka Hantaro (1865-1950) was a leading physicist of the prewar Japan. His enthusiasm for physics was so famous, that a rumor was going around him after the Russo-Japanese War (1904-05) that he was unaware of that war because of his hard work. Of course the rumor was groundless, but it was a fact that the rumor spread out immediately, continued persistently and many people believed it real in the prewar Japan. We did not focus in the reality or unreality of the rumor, but in the so-called social function of it. It is our problem to see whether the people hearing the rumor respected or despised such a scientist, and then how the public opinion of Japan considered the attitude of the basic scientists toward society and war. Our hope is that this report be considered as a case study of the science history whict reflects the relation between science and society.